東京大学医学部と近代タイポグラフィ揺籃の地
津藩 藤堂和泉守上屋敷と門長屋

『江戸名所道外尽　神田佐久間町』
安藤広景画、辻岡屋、
国立国会図書館　請求記号：寄1-9-1-7

幕末の浮世絵『江戸名所道外盡』（安藤広景）に描かれた「外神田佐久間町」の江戸庶民の正月風景である。江戸期町人地には町名があったが、武家地と社寺地には名がなく、この絵士：広景も「外神田佐久間町」として庶民の正月風景を描いているが、外神田佐久間町は画面左手にあたり、ほとんど描かれていない。

実際に描かれたのは現・東京都千代田区和泉町一にあたる、伊勢津藩（現在の三重県津市周辺）藤堂家門長屋の風景である。この藤堂藩二十七万九百五十石藩邸（上屋敷）の敷地と門長屋はおおきく、平野富二は画面右側の最奥部に仮工場を設置したと見られる。

平野富二がここを本拠地とした期間は1872年7月–73年7月までのほぼ一年間という短い期間であったが、平野が東京での最初の根拠地としたのは、この現東京都千代田区和泉町一の東南あたり、現和泉公園の地であったとみてよい。

維新後にこの地は新政府に収公され、おもにのちの東京大学医学部の揺籃の地となる。ここを根拠とした施設は明治初期にはげしく変化したが、明治5年に藤堂家の官位名にちなんで「和泉町」と名づけられて以来、敷地そのものは旧藤堂藩邸の敷地をもってその境界としている。

ここには東京大学医学部の前身「大学東校　だいがく とうこう」が開設され、森鷗外もこの門長屋で寄宿生活をすごし、小説『雁』にこの風情をのこしている。

○大学東校、大学東校活版所跡 ⇒ 東校活版所 ⇒ 文部省編集寮活版所（通称：文部省活版所）跡

千代田区神田和泉町1（もと津藩 藤堂和泉守上屋敷門長屋）

明治2（1869）年12月、当地にあった大病院と医学校が合併して「大学東校」となった。大学東校とは湯島にあった「大学」に対して東に位置することに由来する。

医学教科書や講義録を活版印刷にするため、工部大学校出身の絵士であった大学中写字生（のち大写字生）の島　霞谷（しま かこく　1827–70）が、独自の技術によって鋳造活字を開発し、大学東校官版として発行した。島活字をもちいた大学東校官版としては、石黒忠悳（いしぐろ ただのり　1845–1941）編訳による『化学訓蒙』、『虎烈刺〔コレラ〕論』、それに『検尿論』などが知られている。

明治3（1870）年11月島　霞谷が病死したため、明治4（1871）年6月に本木昌造が活版御用を依頼されて「文部省御用活版所」の設立にいたった。

明治4（1871）年7月、文部省が新設されて大学東校は「東校」と改称され、その時「大学南校 → 南校」の活字掛に継承されていた蕃書調所以来の活版諸設備は東校構内に移され、同年9月に「文部省編集寮活版部」となったが翌年9月に廃止された。その際活版諸設備は「正院印書局」に移管された。

なお歌川広重の弟子である歌川広景（うたがわ ひろかげ）は生没年が不詳で、謎の多い人物とされているが、活動期間は幕末の安政ー慶応（1854ー68）年間に集中しており、この錦絵「外神田佐久間町」は、当時も現代もその姿をよくのこしている千代田区神田佐久間町三丁目付近から眺めた情景で、幕末にこの地にあった藤堂和泉守上屋敷の正門とそれに続く門長屋の情景をよく写している。

森鷗外（もり おうがい　1862–1922）は医学生時代の明治13（1880）年この門長屋に寄宿しており、その頃のこの門長屋の様子を小説『雁』のなかに垣間見ることができる。この藤堂藩の二階建て門長屋は堅固にできており、二階の窓はいわゆる武者窓のうち、横木をわたした「曰窓（いわく）」であった。

東京大学の歴史

沿革略図

貞享元年12月	（天文方）		
寛政9年12月		昌平坂学問所（昌平黌）	
文化8年5月	（蛮書和解御用）		
安政2年1月	（洋学所）		
安政4年1月	蕃書調所		
安政5年5月			種痘所
万延元年10月			（幕府移管）
文久元年10月			西洋医学所
文久2年5月	洋書調所		
文久3年2月			医学所
文久3年8月	開成所		
明治元年閏4月			軍陣病院
明治元年6月		昌平学校	医学校
明治元年7月			大病院
明治元年9月	開成学校		
明治2年2月			医学校兼病院
明治2年6月	（大学校分局）	大学校	（大学校分局）
明治2年12月	大学南校	大学	大学東校
明治3年7月		（閉鎖）	
明治4年7月	南校	（廃止）	東校
明治5年8月	第一大学区 第一番中学		第一大学区 医学校
明治6年4月	（第一大学区） 開成学校		
明治7年5月	東京開成学校		東京医学校
明治10年4月	東京大学（法理文・医）		

まだ大学医学部が下谷にある時の事であった。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、碁盤の目のようにした壁の所々に、腕の太さの木を竪に並べて嵌めた窓の明いている、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になっていて、学生はその中で、ちと気の毒な申分だが、野獣のような生活をしていた。勿論今はあんな窓を見ようと思ったって、僅かに丸の内の櫓（やぐら）に残っている位のもので、上野の動物園で獅子（しし）や虎を飼って置く檻の格子なんぞは、あれよりはるかにきゃしゃに出来ている。

○文部省御用活版所（小幡活版所）跡

千代田区神田和泉町１
（もと津藩 藤堂和泉守上屋敷門長屋跡）

明治４（1871）年10月、平野富二が本木昌造の指示で、小幡正蔵を所長として派遣して設立した。当初は大学・大学東校・大学南校に活版を納入する目的で設立したが、官制の変更により「文部省御用活版所」となった。

しかし明治５（1872）年９月、当地にあった文部省活版所が廃止されたため「小幡活版所」と称して自主営業の道をたどり、明治６（1873）年になって小幡正蔵は平野富二の了解を得て小幡活版所を閉鎖し、共同経営者だった大坪本左衛門と共に「大坪活版所」（神田五軒町の湯島孀恋坂下〔当時〕）を設立して独立した。

○長崎新塾出張活版製造所（平野活版製造所）跡

千代田区神田和泉町１
（もと津藩藤堂和泉守上屋敷門長屋跡）

明治５（1872）年７月、平野富二は新妻古まと社員８名を引き連れて長崎から上京し、文部省御用活版所の一部とそれに隣接する部屋を借り受けて、活版製造のための事業所ならびに住居とした。すなわち平野富二の東京での活版製造事業はここからはじまった。

当時は政府の一部機関を除き、一般には活版印刷の効用が未だに認識されていなかったため、活字・活版の販売に苦労した。そのため、諸官庁に布告・布達類の活版印刷化を働きかけたり、手引式印刷機の国産化に着手して活版印刷の普及を図った。

一年足らずのあいだに活字の需要が急速に増大したため、手狭な長屋を引き払って築地に土地を求めて移転した。それが「東京築地活版製造所」のはじめである。